《書評》

『満族史研究』8,（2009.12）

岡田英弘編『清朝とは何か』（別冊『環』⑯）

澁谷　浩一

本書の趣旨は冒頭に掲げられた編者岡田英弘氏の序文に端的に示されている。すなわち，清朝を「秦・漢以来の中国王朝の伝統を引き継ぐ最後の中華王朝」と見る一般的な視点は不正確であり，満洲・モンゴル・漢人の推戴を受けて即位した皇帝を頂点とする「大清」という国号を持つこの王朝を，多言語史料を駆使するさまざまな研究者による新しい切り口で捉え直そう，というのである。執筆者は岡田氏に，宮脇淳子，楠木賢道，杉山清彦，岩井茂樹，M・エリオット，村上信明，山口瑞鳳，柳澤明，鈴木真，上田裕之，岸本美緒，渡辺美季，中村和之，渡辺純成の諸氏を加えた総勢15名。編者の岡田氏は改めて紹介するまでもない世界的なモンゴル・満洲学者であるが，執筆陣も大家・ベテランから新進気鋭の若手までいずれも第一線で活躍する研究者が顔をそろえている。本書は学術論文集ではなく，やや専門的とはいえ一般読者を対象とした啓蒙書であり，個々の論考は執筆者自身の手による専門論文等を下敷きに一般向けに書き下ろされたものである。よって，本稿では個別論文の内容を詳述することは避け，全体の構成・概要を紹介した後，本書出版の意義を中心に評者の読後感を記すことにしたい。

巻頭には30頁にわたる藤原書店編集部による岡田英弘氏へのインタビュー記事が掲載され，『世界史の誕生』（筑摩書房，1992年）に代表される岡田氏の持論がインタビューならではの分かりやすい語り口で示される。モンゴル帝国から現代につながる流れの中で清朝をとらえるその視点は本書全体を貫く基調ともなっていると言えよう。

本文は大きく三部に分かれている。以下，各部ごとにコラム的短編記事を除く各論考を掲載順に取り上げ，概要を紹介する。第一部「清朝とは何か」の冒頭は宮脇氏による「大清帝国にいたる中国史概説」。黄河流域における中国文明の発生を起点とし，王朝交代史として叙述されがちな従来の中国史像を批判する導入的論考である。これを受けた岡田氏「世界史の中の大清帝国」は，モンゴル帝国から始まる世界史の流れの中で成立した大清帝国が，5種族の同君連合から国民国家へと変質して行く様を概観する。つづく杉山氏「マンジュ国から大清帝国へ」は，最新の研究成果に基づく，帝国の成立過程に焦点を絞った論考。岩井氏「漢人と中国にとっての清朝，マンジュ」は視点を変えて，漢人の側から見た清朝像を描く興味深いものである。第一部の最後は，アメリカにおける“New Qing History”と呼ばれる潮流（ほぼ本書の趣旨と軌を一にする）を代表する研究者の一人であるエリオット氏（楠木編訳）の「清代満洲人のアイデンティティと中国

統治」。圧倒的な少数者であったツングース系満洲人による支配が現代中国にもたらしたものは何かを問いかける。

第二部「清朝の支配体制」の冒頭は杉山氏「大清帝国の支配構造」。マンチュリア（中国東北部）からユーラシア東方全域に拡大発展したこの帝国の支配構造を斬新な概念図とともに提示し,「中国」という言葉ではくくれないこの国家の本質を論じる。村上氏「「民族」の視点から見た大清帝国」は，通常八旗＝満洲としてとらえられがちな八旗内部の多様性を，八旗蒙古・八旗漢軍を取り上げながら論じる。つづく宮脇氏「大清帝国とジューンガル帝国」は18世紀半ばまで大清帝国最大のライバルであったジューンガル帝国の興亡を描く。山口氏「清朝とチベット」は，近年特に注目されている清朝とチベットの関係について，チベットが最大の影響力を持ったダライラマ5世・摂政サンギェーギャツォの時代を中心に丁寧に概説する。つづく柳澤氏「清朝とロシア」は，他の西洋諸国とは異なり，清朝がその成立期から継続して関係を持ったという点において注目されるロシアとの関係の推移を跡付ける。鈴木氏「雍正帝の政治」は,著名な宮崎市定『雍正帝』(中央公論社，1996年；初出1950年）からはうかがうことが出来ない「満洲人のハン」としての雍正帝の姿を浮かび上がらせる。第二部の最後，上田氏「貨幣史から描く清朝国家像」は，貨幣史の展開を追う中で，満洲人王朝としての側面を含む清朝国家の複合性に迫る異色の論考となっている。

「支配体制の外側から見た清朝」と題する第三部では，より広い視野の中で清朝をとらえようとする議論が展開される。岸本氏「「近世化」論と清朝」は，16世紀から17世紀の世界史理解のために氏が提唱する「近世化」論の文脈の中に清朝を位置付ける。楠木氏「江戸時代知識人が理解した清朝」は，漢籍のみを材料とした江戸時代の知識人が，清朝の内陸アジア的な特質を見抜いていた事実を明らかにし，それが内藤湖南に代表される近代東洋学に受け継がれてゆく様を描き出す。つづく渡辺美季氏「琉球から見た清朝」は島津の侵攻を受けた直後に明・清交代という激震に見舞われた琉球王朝の対処の有様を描く。中村氏「蝦夷錦,北方での清朝と日本の交流」は，樺太を通じて日本列島にもたらされた清朝の官服＝蝦夷錦に象徴される北方での清朝との交流を描く。日本列島がその北と南で清朝といかに密接に結びついていたかが改めて浮き彫りにされている。つづく渡辺純成氏「清代の西洋科学受容」では，明末から清代前半にかけての時期を中心に西洋科学の受容史が概説されるが，満洲人が支配する清朝宮廷の存在が西洋科学の受容のあり方に影響を与えていたという指摘が興味深い。杉山氏「近世ユーラシアの中の大清帝国」は，17-18世紀にユーラシアに併存した帝国群――とりわけ「イスラーム国家」としてまとめられることの多いオスマン，サファヴィー，ムガルの3帝国――と大清帝国を比較考察し，中央ユーラシアに出自するその類似点を指摘するスケールの大きな論考。第三部冒頭の岸本論文と同様に，世界史の中での大清帝国の位置付けを試みる。第三部の最後,宮脇氏の「大清帝国と満洲帝国」は,大清帝国勃興の地にやがて満洲帝国が成立してゆく過程を,近現代世界史の激動をからめて描く。戦後60年以上が経過する中で，近年満洲（帝）国に対する関心が高まっているが，その前史となる大清帝国に対する理解がいかに重要であるかを教えてくれる。

以上の主要論考以外にも，各部に数編ずつのコラム的記事が挿入されている。ここでは具体的な紹介は控えるが，興味深い論点・エピソードが満載されており，読者を飽きさせない。一般読者にとっては，興味を持った部分から読み始めることができ好都合であろう。また，巻頭には12人の清朝皇帝の肖像と系図，巻末には詳細な年表が付されており，有益である。特に年表は，紀元前221年から2008年までの期間を取り上げ世界史の動きと連動させて示すもので，清朝の歴史を世界史の中に位置づけようとする本書の姿勢が凝縮されている。

これまで，清朝の歴史を扱った一般向けの書籍は，世界史や中国史などのシリーズ中の一冊（明とあわせて「明清」という枠組みが取られることも多い）として，一人ないしは多くても数名の分担執筆という形を取るのが一般的であった。本書は，大清帝国（清朝）に的を絞って，15人の専門研究者が一般読者を対象に文章を寄せるというほとんど前例のない形式を取っている。それぞれの執筆者は，最も得意とする自己の研究分野に焦点を絞り，最新の研究成果をもとに執筆しているため，個々の記述の信頼性は極めて高い。これは分担執筆の大きなメリットである。読者は，それぞれの執筆者が提示する様々な角度からの研究視点を通じて，この巨大な帝国の多様な側面をながめることになる。読み終えた読者が抱く大清帝国に対するイメージが，本書を手に取る前から大きな変化を遂げていることは間違いのないところであろう。ただ，本書全体を通じて随所で繰り返される，「最後の中華王朝」の枠を超えた清朝の多様性・複合性についての主張は，評者にはややしつこいものに感じられた。しかし，おそらくはそれも評者自身が同じ認識を共有しているがゆえであり，一般読者にとっては分担執筆のメリットを損なう程のものではないであろう。

本書では，清朝の多様性を浮き彫りにするために，支配下に組み込まれたチベット，密接な関係を持ったロシア，ジューンガル，琉球，蝦夷地にそれぞれ独立した論考をたてている。すでに述べたようにその狙いは十分に達成されていると言えるだろう。ただ，無い物ねだりを承知で言えば，帝国内の要素として，現在のモンゴル国にほぼ相当するハルハ＝モンゴル，さらには現在ウイグル族と呼ばれている新疆のトルコ系ムスリムについて専論をたててもよかったのではないか。これらについては，岡田氏の論考をはじめ，触れられていないわけではないが，モンゴリアの遊牧民や新疆オアシスのムスリムの視点から見た清朝像を具体的に示す専論があれば，中央ユーラシア史の流れを汲む清朝に対する読者のイメージはさらに広がったと思われる。また，周辺勢力としては，当初清朝を夷狄として見下し，武力によって屈服・服従させられた後も複雑な感情を抱き続けた朝鮮の存在が注目される。朝鮮を取り上げることによって，「支配体制の外側」から清朝をとらえる視点に重要な要素を加えることが可能だったのではないか。

さて，これまで本書が想定する読者については，単に「一般読者」という言い方をしてきた。

藤原書店は過去に雑誌『環』および本書と同じ別冊『環』で，満洲・満鉄を取り上げている[1]ので，そこから時代を遡って清朝に対する興味を抱く社会人読者も当然存在するであろう。ただ，ここで評者が，本書出版の意義を考える上でより注目したいのは歴史教育との関連である。近年，中学校の歴史的分野はほとんど日本史中心になっているので，清朝についてなにがしかの知識が得られるのは高校の世界史ということになる。本書を手に取る読者として，高校世界史で清朝に対する関心を抱いたもの——大学で歴史を学ぼうとする学生ももちろん含む——，或いは高校教育の現場で世界史を担当する教員が想定できるであろう。そこで試みに，手元にある最新の世界史の教科書（『詳説世界史B』山川出版社[2]）を広げてみよう。清朝については，第Ⅱ部の冒頭に設けられた第8章「アジア諸地域の繁栄」の中で取り上げられている。そこには「清朝の皇帝は，中国歴代王朝の伝統をつぐ皇帝であると同時に，満州人やモンゴル人にとってはモンゴル帝国のハンの伝統をつぐ北方遊牧社会の君主でもあった。……彼らはこの二つの面を兼ねそなえて独裁的な権力をふるった」という記述がある。清朝を単なる伝統的中華王朝としてとらえない視点はすでに教科書に取入れられていることが分かる。なお，この教科書はモンゴル帝国・元については中国史として扱う立場を取らず，第Ⅰ部第4章「内陸アジア世界の変遷」で扱い，清朝の記述がある第8章そのものもモンゴル帝国崩壊後のアジアに成立した諸国家という位置付けで，明・清以外にティムール，オスマン，サファヴィーの諸帝国をまとめて記述している。地域ごとの縦のつながりよりも世界史としての横のつながりを重視していると言えよう。最新の教科書は変わりつつあるのである[3]。

それでは，本書『清朝とは何か』が批判する「従来の」「一般的な」清朝の捉え方はすでに過去のものになってしまったのであろうか。ここで興味深いのが同じ山川出版社から2009年に出版された『もう一度読む山川世界史』（「世界史の歴史」編集委員会編）と題する一般向けの本である。前書きには，以前使われていた同社世界史教科書をベースとして一般向けに記述を見直したという説明がある。評者が入手した初版5刷の帯には「ブームだけでは分からない本物の歴史が読める本」「大反響」の文字が躍り，近年高まりつつある世界史への関心を受けての出版であることがうかがわれる。この本では，第1章から第2章にかけて，殷から清までの「中国史」がほぼ直線的に綴られている。清朝が最後の中華王朝と位置付けられていることは明白である。これが「本物の歴史」であるという主張が通用するのであれば，現在においてもなお「一般的な」清朝理解は根強いと言わねばなるまい。このような状況における本書『清朝とは何か』出版の意義は大きい。本書は，高校の社会科教員を主な読者とする『歴史と地理』の新刊紹介でもすでに

(1)『環』Vol.10（2002年7月）における特集「満洲とは何だったのか」（これをもとに同書店から『満洲とは何だったのか（新装版）』が2006年11月に出ている）及び『満鉄とは何だったのか』（別冊『環』12，2006年11月）。

(2) この教科書の執筆者の一人は，本書にも論考を寄せている岸本美緒氏である。

(3) 本書に複数の論考を寄せている杉山清彦氏が執筆者の一人になっている帝国書院『新詳世界史B』では，チンギス・クビライ以来のモンゴル大ハーンの地位を引き継いだ「ユーラシア世界帝国」清朝というとらえ方がなされている。また，この教科書ではモンゴル帝国についても，世界史の一大画期となったという位置付けで独立した1章をたてている。

取り上げられている[4]。そこでは，上で評者が引用した教科書の同一部分が引かれ，「見落としがちな一文」の重要性を再認識したことが述べられている。新たな研究成果を取入れて変わりつつある教科書を使用し，授業に取り組まねばならない高校教員の苦労は察するにあまりある。記述の変わった教科書を前にとまどう教員も多いのではないか[5]。本書のような形で最先端の研究者により最新の研究成果が分かりやすく解説されることは，高校教育の現場からは歓迎されるだろう。

最後に全くの私事で恐縮だが，今年度（2009年度）評者は，「教員免許更新講習」の担当を命じられ，高校教員を前に話をする機会を得た。もともと清朝の話をするつもりで講義計画をたてていたのであるが，出版されたばかりの本書『清朝とは何か』は恰好の参考文献となった。評者が行なった講義内容は，「チベットラサのポタラ宮に似た建築物がなぜ北京近くの熱河の避暑山荘に存在するのか」という問いから始まる文化遺産と歴史を織り交ぜたものであったが，清朝という帝国の多様性，それが現代中国に及ぼしている影響を論じるという点において，本書の趣旨と共通性が高い。結果，半ば予想通り，一部の受講者から「はじめて聞く興味深い話であった」との感想が寄せられた。近年，研究成果の社会への発信・還元が以前にも増して叫ばれるようになってきているが，本書で繰り返し主張されているように，清朝史研究は，世界史・中国史の理解にとって，また現実の「中国」との今後の関係を考えてゆく上でも極めて重要な位置にある。今後とも本書のような形での情報発信の努力は継続されてゆく必要があろう。

（菊判大，2+2+335頁，藤原書店，2009年5月）

（SHIBUYA Koichi，茨城大学人文学部）

(4)『歴史と地理』629（「世界史の研究」221），山川出版社，2009年11月，塚原直人氏による紹介。

(5) 高校教員の側でも，新しい研究成果をどのように教育の中に取り込むべきかの模索はなされ始めている。神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編『世界史をどう教えるか——歴史学の進展と教科書』（山川出版社，2008年）は世界史分野におけるその一例である。第4章「内陸アジア・東アジア」では，モンゴル帝国や「明清時代史」の教科書での扱われ方の変化が，本書の執筆者である岡田英弘氏や岸本美緒氏等の著作を参照しながら論じられている。